

「写真の町」東川町。

…というものの、実際に

その歴史を知る人は多くない。

東川町にとつての根っこは、

どう形づくられてきたのか。

幕開けからこれまでの

歩みを振り返る。

「写真の町」を
たどる



「写真の町」の夜明け

他にはない独自のまちづくり、
「写真の町」東川町の歩みをたどる。

観光に悩む「行き止まり」の地

「写真の町」のはじまりは、1984年まで遡ります。この年開拓90年、10年後には開拓100年を控える東川町は、「次の時代の東川町」に向けた新たなまちづくりの方向性を模索していました。全国的に「一村一品運動」が広まり、地方自治体はそれぞれの資源を活かしたまちおこしに取り組み流れもあつた時期です。当時の東川町は「お米と工芸、観光の町」をキャッチフレーズにまちづくりを進めていましたが、特に観光においては、天人峡・旭岳の2つの温泉地を有しながらも、富良野⇄旭川⇄層雲峡といったメジャーな観光ルートから外れ、観光客を集めづらい状況でした。観光客を誘致するために様々なイベントを企画していましたが、それらの取り組みは一時的

な効果にとどまることが多く、長期的な視点で町の魅力を発信するための戦略が求められていた時期でした。

迫る100年と一村一品運動

この状況を打開するために、両温泉地区では新たなイベント企画を検討していたなか、天人峡温泉地区のPRなどを請け負っていた旭川の印刷会社社長の宗万忠氏（そまんだし）が、札幌のイベント企画会社であるゼブラ・プラネット（当時は「勇崎企画」）代表の勇崎哲史氏に相談。すると勇崎氏からは、従来の単発的なイベントによる集客策ではなく、東川の自然景観を活かした町全体が発信力をもつ「写真の町」づくりというコンセプトの企画が提案されました。この提案は、「写真」を通じて町の風景や文化の魅力を広く発信し、町内の至るとこ



ろで写真に触れる機会を設け、人々が町に何度も訪れる理由や魅力を創出することを目指したものでした。両温泉地区は、想定外のあまりにも壮大な提案であったことから、温泉街で実現するというよりも、町全体



として取り組むことができないか町役場に企画を持ち込みます。
当時町長だった中川音治氏は、10年後に控えた開拓100年に向けて思案しており、さらに一村一品運動の中で「米」「木工・家具」「観光」

などの要素で、どう他の自治体との差別化を図り知名度を上げていくかを検討していたタイミング。観光地と町の将来について、様々な思いを巡らせていた時期でした。提案から2カ月間検討したのち、1984年の末に「写真の町」実施の判断を下します。このようにして「写真の町」の構想は形を成し、翌年1985年6月1日に東川町は正式に「写真の町」を宣言しました。

町民たちが抱いた疎外感

こうしてスタートした「写真の町」でしたが、すぐに町民に受け入れられたわけではありませんでした。特に最初の10年間は苦難の連続。「写真映りのよい町」として町と写真の連動を謳いましたが、季節ごとの田園風景の移り変わりは町に住む

人にとってごく「当たり前」の日常。「写真」で残していくことに、町民自身が大きな価値を感じることできなかつたのです。

さらに「写真の町」としてスタートしたイベントや写真展の参加者の中心は、町外からの写真家や写真愛好家。地元の人々にとっては無関係に感じられました。町民が写真活動に直接参加する機会は数少なく、「写真の町」は行政の特別事業のように受け止められ、町で暮らす人たちの中で疎外感を抱く人も少なくなかったそうです。東川町国際写真フェスティバル、通称「東川町フォトフェスタ」では、当時から著名な写真家が作品を展示し、専門的な講評が行われましたが、その価値は理解されにくいものでした。多くの町民たちが「写真の町」を掲げる意義を見出せないまま、月日は過ぎていきます。

変化していく町民の意識

開始当初は受け入れられなかったフォトフェスタも、多くの工夫によって町民理解が深まっていく。

町民参加と地域の一体化

理解がなかなか得られないまま「写真の町」がスタートして6年、1991年に就任した町長、山田孝夫氏の下で町内全戸を対象に行われたまちづくりアンケートをきっかけに、写真の町に変化が起こりはじめます。このアンケートでは、「写真の町」を継続すべきかどうかについての町民意識も調査。写真の町を「そのまま続けるべき」との意見はわずか8.6%だったものの、「町民参加を進めるべき」との回答は41.5%で、2つを合計すると過半数超え（「やめるべき」は32%）。「写真の町」の取り組みについての多少の疑問は持っているものの、ここでやめてしまいうことは長期的に町にとって良くない判断だと、町民が感じていたからこそその結果でした。このアンケート

結果を受け、町では写真文化を地域に根付かせる施策を強化していく方向に舵を切ることに。これまでイベントを重視した「東川町国際写真フェスティバル実行委員会」を「東川町写真の町実行委員会」に改組し、その実行組織として一般町民で構成する「写真の町企画委員会」を立ち上げ、「どうやって町民を巻き込めるか」について一生懸命考えを巡らせます。町内商店で写真を飾る企画や小学生が取り組む「写真絵日記」、シニア層向けの写真展など、幅広い世代へ企画を実施。また、これまで別日程で開催していた「商工夏祭り」と「フォトフェスタ」を一体化させ「どんとこい祭り」として同時開催も。役場の電話応対では最初の挨拶に「写真の町、東川町です」と名乗る取り組みもはじまり、あらゆる場面で「写真」を感じさせる工夫

がなされました。

写真甲子園で変化した意識

写真の町宣言から10年後、さらなる転機が訪れます。1994年、全国高等学校写真選手権大会、通称「写真甲子園」がスタートします。全国の高校生が集まり、写真を通じて技術を競うこの大会は、町民参加型の取り組みの象徴となっていきました。写真甲子園の開催によって町民が大会運営や被写体として深く関わるようになり、さらに高校生の町内ホームステイが始まったことなども合わせ、外部の若者たちとの交流が生まれます。町民の「写真の町」への理解と関心の高まりは、現在に続く東川町民の「人を心地よく迎えられる」という意識の土壌づくりに繋がっていきます。

PLAYBACK

文化ギャラリー建設以前は、作品をパネル展示



東川町文化ギャラリーの設立は1989年のため、フォトフェスタがスタートした当初は写真作家の作品をパーティーションなどに展示していました。専門的な施設がないなかでの開始となったため、当時は勇崎氏が主導しながら、町内施設や温泉街の宿も活用し、様々なことを手探りで企画・実施していました。

写真家と町民と一緒に楽しむ様々な催し

フォトフェスタ開始当初の企画として、「仮装大会」がありました。町民が思い思いに変装した姿を、東川賞の審査会委員や受賞者たちが写真を撮りながら審査するというユニークなもの。その他、開拓100周年には「音楽祭」が同時開催されるなど、「写真の町」を東川に溶け込ますため、多くの連携企画が実施されてきました。



『北の国から』の倉本聰氏と町内作家の竹田津実氏が対談



1987年の第3回の開催時には、特別対談を開催。富良野を舞台にしたテレビドラマ『北の国から』の原作・脚本を手掛けた、脚本家の倉本聰氏と、町内の写真家で後に写真甲子園の審査委員も務め、現在に至るまで「写真の町」に尽力している竹田津実氏によるトークイベントが賑わいを見せました。

現在地から見える足跡と風景

20年かけて浸透し、次の20年で進化を遂げる。
未来の20年に向け、私たちが進むべき道は？

産業連携で 「町」が誇る取り組みに

さらに、2000年以降の松岡市郎氏が町長を務めた時代には、より積極的な「写真の町」事業が波及。写真映りのよいまちづくりと自然景観の保全を両面から進めるため、「美しい東川の風景を守り育てる条例」を制定。景観計画に基づく団地造成やオリジナルの婚姻届や出生届をスタートさせるなど、写真と住民生活を結び付けたまちづくりに取り組めます。また、農業、商工業、観光業がスクラムを組みながら産業連携し、「写真の町」を経済に落とし込むことが松岡氏の町長としての公約でもあったため、写真を題材にしたプロモーションや商品開発が次々と進められます。「写真×農業」による米缶の開発や、「写真×商業×

観光」として写真を撮りながら東川の飲食店やクラフト工房、温泉を巡ると豪華景品があたる「みちくさドライブラリー」などの企画もスタート。「写真の町」をベースにしながら、農業、商工業、観光業と連携するために発案された、ユニークな取り組みが次々と実施されました。

町の意識を変えた企画会社の倒産

「写真の町」スタートから20年が経ち、ようやく町に定着してきた頃、大きな出来事が起こります。それが、勇崎氏が代表を務めるゼブラ・プランेटスの倒産です。2005年5月、写真甲子園やフォトフェスタの開催が3カ月後に迫るタイミングでした。当時は企画・運営をゼブラ・プランेटスが一手に引き受けていたこともあり、役場内は騒然。しかし引き下

KEYWORD

まちづくりの基本原則にも 「写真の町」は明記



「写真の町」の考え方は、町の基本原則を定める「まちづくり条例(※)」にも組み込まれた。条例は2015年に制定され、時の町長の意向などにより変わらないように位置付けられている。

がることもできない状況で、担当職員たちも、「やめるわけにはいかない」と腹を括り、町が主体となり準備・開催が進みました。追い込まれた状況で「何がなんでもやりきる」という意識が、結果的に職員のノウ

(※) 写真文化首都「写真の町」東川町まちづくり基本条例

長く続けていくために、
功労者への感謝を忘れずに



KEYWORD

40年の中で、開始当初から「写真の町」を語る人物は徐々に少なくなってきた。第40回フォトフェスタでは、第1回から関わる功労者の代表として、浜辺啓氏に町から感謝状を渡した。

ハウを高めたと関係者は当時を振り返ります。

ここで、20年培ってきた「写真の町」の協力企業や団体関係者、何よりも町民との関係性が大きく活きることとなります。危機的状況の中で、

これまで積み重ねてきた努力を無駄にしないよう、多くの人たちが町に力を貸しました。この時の経験を糧に、新しい企画運営会社を探すのではなく、町の「独自運営」に踏み切ります。今、東川町が大小様々なイベントを実施できるのは、この経験を乗り越え、多くのイベントのアイデアを出し、自分たちで企画、運営した結果とも言えるでしょう。過去に「たられば」はありませんが、今でも「写真の町」の事業をどこかの会社に委託していたとしたら、東川町はここまで注目される町になっただけでなかったかもしれません。

小さな歩幅で築いた大きな道

その後も、「写真の町」として多くの取り組みが実施されていきます。「オリジナル婚姻届・出生届」や、

「ひがしかわ株主制度（ふるさと納税）」など、今にも続く「東川らしさ」といわれる取り組みの多くは、人、自然、文化を大切にすることを謳う「写真の町」の志があったからこそ生まれたもの。その東川らしさによって移住者が増え続け、「地域創生の成功例」として取り上げられることも増えた東川町ですが、その根っこをたどると、実は「写真の町」にたどり着くことが多いのです。この40年、関係者や町の一人ひとりが「町民の生活を豊かにするために、何が最善か？」という選択をし続けてきました。小さな一步一步の積み重ねが大きな道となり、私たちはそこに立っています。そこで受け取ったものを、未来に繋げる必要があるはず。次世代のために「次の一歩」を創るのは、この町で暮らす私たち自身なのです。

- 1984年 10月 | ゼブラ・プラネッツ（当時は「株式会社勇崎企画」）の
写真家 勇崎哲史氏が「写真の町」の企画について町に提案
末 | 中川音治町長が「写真の町」を採用
- 1985年 3月8日 | 中川町長が定例町議会の政策方針で「写真の町」に言及
4月25日 | 東川町国際写真フェスティバル実行委員会を設立
6月1日 | 写真の町宣言
8月24日 | 第1回 東川町国際写真フェスティバル、東川賞授賞式開催
（フォトフェスタは9月30日までの約1カ月間開催）
- 1986年 3月24日 | 「写真の町に関する条例」を制定
| 「写真アンデパンダン展」を初開催
- 1988年 | ボランティア「フォトフェスタふれんず（通称：フォトふれ）」スタート
- 1989年 11月3日 | 東川町文化ギャラリー開館
| 東川第二小学校で体験学習として「写真」の授業をスタート
- 1991年 2月末 | 東川町長選にて、山田孝夫町長が当選
5月 | 「写真の町」が日本写真協会賞の功労賞を受賞
6月 | 町内全戸を対象にしたアンケートを実施。
「写真の町」に対しての町民意識も調査
8月 | どんとこい祭りと東川賞授賞式を同日に開催
8月 | 東川町新まちづくり計画策定委員会（通称「まちづくり百人委員会」）を組織
- 1992年 9月 | まちづくり百人委員会より「写真の町」がリーディングプロジェクト
として位置付けられる
| 92年度まで観光事業が好調で、年間の観光客が100万人を超える
- 1993年 5月 | 山田町長が記者会見にて写真の町を「東川町の最上位プロジェクト」
として発表
| 東川町国際写真フェスティバル実行委員会を解散。
写真の町実行委員会を組織。
委員会の内部に「町づくり」「文化」「産業経済」3つの部会を設置
- 1994年 | 開拓100年、写真の町宣言から10年目
| 全国高等学校写真選手権大会（写真甲子園）がスタート
| 記念写真集『光画録』を町内全戸に配布
5月 | 東川高校に写真部が誕生
- 1999年 10月 | 写真の町15周年記念でジャーナリスト筑紫哲也氏の講演会を開催
12月 | 東川町が第25回日本写真協会賞受賞。自治体として初の受賞
- 2000年 1月 | 東川町写真の町実行委員会に北海道が地域文化選奨 特別賞を授与
1月 | 町の人口が7500人を突破
- 2001年 1月5日 | インフォメーションセンター「道草館」開館
| ひがしかわ写真の町倶楽部を設立。2009年まで活動
- 2002年 | 「美しい東川の風景を守り育てる条例」を制定
- 2003年 2月 | 東川町長選にて、松岡市郎氏が当選
7月 | 写真甲子園の同窓会を設立
- 2004年 8月 | 「写真アンデパンダン展」を「写真インディペンデンス展」に改称
9月 | 大雪旭岳源水公園がオープン
- 2005年 5月 | 「道草館」の道の駅登録を記念して、みちくさドライブラリー初開催
5月 | ゼブラ・プラネッツ株式会社が倒産。企画運営を町が担う契機に

- 写真甲子園の使用機材を変更。フィルムカメラからデジタルカメラへ
- 2006年 10月 | オリジナル婚姻届・出生届をスタート
| 景観法に基づく景観計画を策定
8月 | 君の椅子、初めての贈呈式
8月 | 現在に続くフォトフェスタの恒例企画、「思い出写真館 NIJI (にじ)」と東川ストリートギャラリーを初開催
- 2008年 4月 | 町役場の大きな機構改革「写真の町課」を設立
8月 | 写真甲子園の出場校のホームステイを初実施
9月 | 「写真の町」ひがしかわ株主制度（ふるさと納税）がスタート
12月 | 町の写真家、飛弾野数右衛門氏が逝去
- 2009年 | 一般財団法人地域活性化センターの第13回ふるさとイベント大賞で写真甲子園が優秀賞を受賞
| 文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）に東川町が選出
- 2010年 4月 | 東川中学校の全生徒に名前入りの「学びの椅子」を卒業時に贈呈する事業スタート
7月 | 東川賞を「写真の町 東川賞」に改称。飛弾野数右衛門賞設立。賞金も見直された
- 2011年 4月 | 「写真の町」担当の学芸員を正規採用
- 2012年 5月 | 「東川米」が道産米で初の地域団体商標登録
- 2013年 5月 | 写真の町 ひがしかわ写真少年団発足
- 2014年 3月 | 写真文化首都宣言を発表
7月 | 写真文化首都「写真の町」東川町まちづくり基本条例を制定
| 東川アーティストインレジデンスがスタート
- 2015年 8月 | 第1回高校生国際交流写真フェスティバル（ユースフェス）開催
12月 | 町の人口が8000人を突破
- 2016年 3月 | 近年の東川のまちづくりを記した『東川スタイル』（産学社）発行
- 2017年 11月 | 映画『写真甲子園 0.5秒の夏』が全国で公開
- 2019年 | 展示企画「東川賞歴代受賞作家屋外写真展」GAKKOTEN がスタート
| 東川オフィシャルパートナー制度を開始
- 2020年 | コロナ禍で多くの町の事業が実施できず
- 2021年 3月30日 | 東川町文化ギャラリーがリニューアルオープン
7月 | 勇崎哲史氏が逝去
- 2023年 2月 | 東川町長選にて、菊地伸氏が当選
| 写真甲子園が30回目を迎える。30年間審査委員長を務めた立木義浩氏が退任。代表審査委員として野村恵子氏が就任
- 2024年 6月 | 東川に住まう18名の写真家による写真展「東川×写真×私」開催
| 東川町国際写真フェスティバルが40回目を迎える
| 東川町が開拓130年を迎える。大黒摩季氏のコンサートを開催
- 2025年 6月 | 6月1日「写真の日」で、「写真の町」が40周年を迎える

年表制作：2025年3月31日 取材協力：高橋 朗（PGIギャラリーディレクター）

参考資料：『東川町史 第三巻』（写真文化首都「写真の町」東川町、2022年）

本章は、東川町役場への取材をもとに制作しました